

すてきな大分を見つけ、伝えよう！

8月講話会ご報告

皆さまお元気ですか。朝晩の日射しのなかにもやや秋の訪れを感じる季節となって参りました。いよいよ実りの秋の到来です。楽しみですね。

さて、8月29日の竹田市大津哲郎様宅『慈世庵（ジョアン）』で開催しました「講話会」は、落ち着いた素晴らしい会場の中で、竹田市歴史文化館の佐藤晃洋館長より『瀧廉太郎－憾（うらみ）の真実』と題するお話を拝聴いたしました。今年は、廉太郎没後120年という節目の年に当たり、改めて廉太郎の生涯について共に学びました。

講話会の会場となりました大津哲郎様のお宅は、『荒城の月』を作詞した土井晩翠の直筆の書が、2点掲げられております。館長にお聞きいたしますと、この書は、土井晩翠が廉太郎没後40年（昭和17年10月）の記念祭典に竹田市に来られ、その時、廉太郎を偲び綴られたものであることが分かりました。貴重なものでした。

また、今回瀧廉太郎の講話会を準備する中で、驚いたのですが、大津哲郎様の家系が、瀧家と無関係ではないことが分かりました。

大津様の母方（川村家）は、日出町の出身で、江戸時代日出藩の家老職を務めたそうです。一方の廉太郎



の瀧家も日出藩の家老職にあり、先般開催の竹田市歴史文化館企画展で、何と官舎の全く同じ場所に住んでいたことが分かりました。今は、その場所は、日出幼稚園となっています。大分市歴史資料館蔵の日出藩地図には、官舎の入居者名が、記入されており、大津さん母方の川村家の名前が残っておりました。年代は後になりますが、その同じ場所に瀧廉太郎の家族が入居していたということです。大津哲郎様の挨拶で、「今回瀧廉太郎の講話会が、大津家で開催となったことは、何よりも亡くなられた川村家の出である母親が喜んでくださっていると思います」との感謝の言葉がありました。

《瀧廉太郎の講話から メモ》

①廉太郎は『写譜』を大切にし、熱心に取り組み、音楽家としての力をつけて行った。

普通の人々は、写譜を軽く考えるが、音楽の力をつける上で、これが大変重要であることを知り、誰よりも熱心に取り組んだ。

②廉太郎は、子供たちに日本の言葉にあった歌を楽しく歌ってもらえるようにとそれを理想とした。

東くめ、鈴木毅一と共に子どもたちがよくわかり、楽しんで歌えるような話し言葉に曲をつけた唱歌集『幼稚園唱歌』の編集に取組んだ。「お正月」はこの時に生まれた。

③廉太郎の音楽家としての大成には、恩師をはじめ家族や親せきの多大な支援があった。

竹田での高等小学校恩師 後藤由男先生との出会い。音楽学校（東京）での従兄の大吉の理解と支援。特に廉太郎の音楽家大成のために、大吉の家族ぐるみで通いやすい場所に孟母三遷した。

以上